経済学部チャペル講話「**人間を考える**」　2024年10月10日

# ファンタスティック！そうぞうの世界

田　禾　教授　（人文科学、中国語学）

夏休み中、「村上隆もののけ京都」の展示会を見に行きました。京セラ美術館の日本庭園に高さ13m「お花の親子」というタイトルのルイヴィトンとのコラボ作品が池の中に立っています。擬人化表現がそう簡単に行われているのが、村上らしいという感じです。ご存知のように、世界的に有名なアーティストである村上さんの作品は、コモディティ化していると批判されているようですが、美術の素人である私は、展覧会から多くのインスピレーションと喜びを得ています。

まずは入口にある「阿像」と「吽像」ですが、口から発音する「阿」には「物事の始まり」、「吽」には「物事の終わり」という意味があり、それぞれの足の下に病気の鬼を踏んで、「自然災害や病魔などの災いから人々を守る」という願いが込められているそうです。作品の中にはいつもの微笑ましい花以外、髑髏の形をした花もあり、生と死の一体感を表しています。また、小さな花がテレビを見たり、ラーメンを食べたり、野球をしたりと、日常のあなたや私を表しています。京都の話ですから、金閣寺の立体的な絵もあります。金閣寺の水面に映る姿は美しく、水面に映る自分の姿に恋をしたギリシャ神話のNarcissusを彷彿とさせる魅力にあふれています。展示会に一つ暗い部屋があり、東西南北を司る四神である「青竜」「白虎」「朱雀」「玄武」はそれぞれの方位で大きいスクリーンで描かれていて、そこにいると異空間に入るような体験です。中国の古代神話から伝えてきた四神は中国の戦国時代から漢王朝初期に書かれた《山海経》に記載されます。この本は約32,000語で、18巻に現存しています。麒麟、海に生きる人魚、山の奥に隠れている知恵を持つ羊など霊獣、霊鳥がたくさん載っており、ほかの国の神話にも存在するものと連想できる面白い本です。四神は四つの方向と同時に、季節も関わり、具体的には春の青を象徴する青龍、秋は白虎、夏は赤の朱雀、冬は黒の玄武です。今回の作品は日本歴史に名前残るほど有名な絵からいくつかの技法を加え、日本絵の特徴を再現しています。例えば《青龍》の荒れ狂う波濤の上に現れる積乱雲は、葛飾北斎《神奈川沖浪裏》のうっすらと描かれた白い積乱雲を意識して描いているとも言えます。《白虎》の３匹の虎の目つきは、曽我蕭白の《雲竜図》と共通する感じで、そして虎の位置配置は円山応挙の「子犬」の文脈を思わせます。展示会の中に一番気に入りは大作《洛中洛外図　岩佐又兵衛　rip》です。昔の京都の街並みと人々の暮らしぶりが目の前に徐々に広がり、金箔の雲に可愛い雷神と風神が遊んでいます。中国の敦煌石窟の壁には風袋を持つ風神と輪の形に連ねた太鼓と共に手にばちを持った姿の雷神がセットで描かれて

います。調べてみると、風神は古代インドでは風をつかさどり、悪い神を追い払い、豊穣や福徳を授ける神とされています。当然、雨を運び、パワーを持つ雷も崇められます。中国語に自然現象を語る「降雨」と「落雷」は無主語文となり、それは風神と雷神がその動作主であるという理由でしょうか。